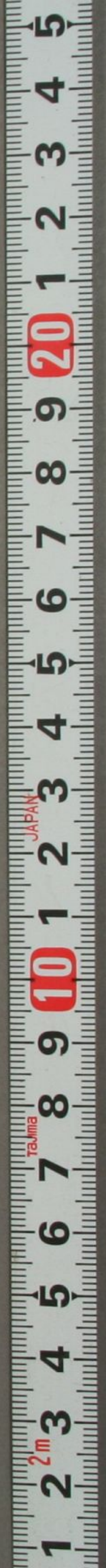


中村俊定文庫
文庫 18
77
3



後
枝
集

維
舟
極



()

藤枝 春部

元日

松

江

雅

舟

山々人々春をえ方や笑の眉

草々の花の足なり福委草

春や先声の花咲松はやし

水祝

あみけるや玉へしかへらぬ水祝

若菜

我頼む七草そなたの古の花

四方に名を流すは京の水菜哉



白むくの袖にもすかす小芥哉
 左義長
 左義長の竹や竹物はやし物
 梅
 尋に春にやはうく梅の蒼哉
 目に鼻に氣に入梅の色香哉
 梅の香をつれ立笛の遠音哉
 宮岡や越中梅の名のやえ
 鳥
 朝敷奇の鳥や黄鳥宿のせ
 鳥よをのれ朝声夕まといひ
 土筆
 上臈のお午にかりれよ筆つ花
 小谷立静過善
 夢の春や言美に跡の筆つ花
 跡ノ老
 かたちこそ太山隠の鬼跡老
 山葵
 谷のわさび大余許ならぬ春日哉
 共願

白むくの袖にもすかす小芥哉
 左義長
 左義長の竹や竹物はやし物
 梅
 尋に春にやはうく梅の蒼哉
 目に鼻に氣に入梅の色香哉
 梅の香をつれ立笛の遠音哉
 宮岡や越中梅の名のやえ
 鳥
 朝敷奇の鳥や黄鳥宿のせ
 鳥よをのれ朝声夕まといひ
 土筆
 上臈のお午にかりれよ筆つ花
 小谷立静過善
 夢の春や言美に跡の筆つ花
 跡ノ老
 かたちこそ太山隠の鬼跡老
 山葵
 谷のわさび大余許ならぬ春日哉
 共願

ことにゆくいひ蛸巻る料理哉

飯蛸

わす見ても久し住の江の酢蛤

酢蛤

しのみ貝や又三百餘巻多見やけ

蛸

またといふに地うてはいかに胡椒の粉

馬刀

我も家と春の海へのがうな哉

奇居虫

一

鈴と露置まどほらん蕨かな

苗代

苗しろや兵糧をぬ世この穂

苗代の地畠ほえみ扇かな

柳

柳葉の雪には雨や杓杞の汁

青柳に出頭するや春の風

風の午や藤々放下の玉柳

錢割に

しなへるは風の柳の帆掛舟

10
20
新宿
甲州屋
特製

雲雀
あひるのほり知や直なるその道

鶯
うその歌今たふるやはなる花の雪

燕鳥
つはくうもめてたき客や夫婦ふれ

帰厠
帰厠もや片時さうす友思ひ

春駒
日みいさや道忘羊春の駒

三才

白魚
煮き程白魚白し 莖の汁

目指
醤油もて目ざしぬらすや焼の上

鮓
折らぬへは蒜の香もよし 鮓脰

常よりも春へになれつ鮓のすし

桜鯛
魚肥ち風味貴し 桜鯛

鼻おれやいは、若木の桜鯛

三才

霞

かすめ共春の明ほのや目の茶

出替

あかほりの水士は車釣瓶哉

三日汐子

蛤のかうりとひるや春の海

はまくりの中や汐子ぬ三日のせく

雛

今日そ娘おひはわれひるな草

桃

萬日追如して新望

万葉の関の敷や三千代草

橋

人道の道くさするな地り橋

木瓦

風の午よこける唐ほけ花ににく

梨花

雨の中や柳も柳梨花と梨花

花

南枝花飛葉は北もほかめ哉

花のとさ—せめてのそくやゆきし色
 奇仙連奇せしに
 何か—く 三十六句花のせと
 更て帰る途奇師に逢花見哉
 东山は幕に紋片—花さ切り
 諷の詠にて
 花は錦音曲や声のあやのせん
 散跡と思はぬ花や白拍子
 奢る共花見や巾免夢の春
 中着のかぬひ、かする花見哉

白雪も花の養水や四分六分
 親も親子も子なりけり花の露踏
 能ならは也や松風よ月と花
 宮寺のぼさう 袴けすや花渡無
 白かす玉花や昭君の穉空言
 制 札と見て
 花折るかたはくはやはらけ奇一首
 花おるや午の内より胸の中
 花の役や三春人は木この春
 花守や見におらせしてしらす白
 四不

窓深き人香も知や花見月

老の目や日々に石菖花見月

四方山を壺前裁や花の春

夜を日に榊木の花か周も所し

出京の人所望に

京より花を見ぬ目や旅心ち

○花と水何はもたすと京住居

都人三里の冬や花さかり

半分は花見小神と都哉

唐道て都や花のかくれ里

四

10
20
新編甲州産物製

兵法や花もおく有鞍馬山

小里へもうへ人呼呼や花の徳

葉するや仕への晦晦花のかせ

主君独と思へは花とふたう哉

○夜明けて花にかほやさうり取

老のあやみ着たうに成花見哉

笠羽折ぬけはいつこ花盛

朝半水極其次は花見かな

さそお計さそはれて花盛

我心犬子道る花見かな

五

二
五
日

()

腰へうろちん所存は誰にも花見酒
 花見酒音羽の滝は雲哉
 花をふんで惜まぬ物は酒代哉
 山は花天佛殿も錦かな
 鞍馬山花の火う地や春の陽
 都人に鞍馬の臆せし花の白
 芽野川や花に鞍をく馬の代
 花は芽野伽藍一を木の目哉
 初瀬に
 かうかく宿主あうし花さ甲

月をしろく、ひ
を返るるに数夜
12るる

(7)

宇路にまかるとして
 是中又宇路の中宿花見駕籠
 夜をこめて見に行はやの花の昼
 人の波(飛)計か花さかり
 花な茶屋煙も花の枝折哉
 旅行に
 茶屋酒屋花山や旅の三徑
 花をしろくこたえい、わち上は象
 酒なきといふと聞て
 まにろくかぬや下戸の花見酒

10
20

新
宿
甲
州
道
神
歌
一
五
う

ケニタフハフリモノノ
諺ナリ

()

のひやすき谷や各別榎かり
 榎かり雨はあり物や笠とかめ
 大谷近き外
 松杉の外トウイの得意トウイや山榎
 赤染もさらけうことや山榎
 白雪や山榎戸のよせかまら
 牛生雪下無行
 糸榎着のしなひを三長哉
 彼岸榎見れば一種も百味哉
 花のけはひ冷しけり焼榎

六ウ

(8)

花も唐へ聞え渡る初瀬寺
 清水寺にて
 観音の光と花や飛虚空
 花より人こそあんに鐘樓堂
 寫眞もよしや花吹風ふせき
 花に除よといは風の口二た
 風にあふ花や交野の雄と鶴
 捨詞ところほよもや花の莖
 榎
 柳榎塔こきませつ清水寺

六イ

10
20
新宿甲州産特製

先いれく玉章媛一見さくら
 誰故に乱る酒そ見極
 春の色は浅黄極やときそな
 霞こそ下孫上孫はかは極
 志ては火の火極か葎若すき
 乙さくらの陰やひ輪子都人
 順礼をしてや都といせ極
 商人によききぬや他の炭極
 八重極人や九重の山
 江府之人所望

10
20
新宿甲州屋特製

都不通それなせ留士と江戸極
 江戸極見こーや留士と山極
 谷一散や落ても水のうづ極
 花見小神いくつか裾をけりかや
 楊貴妃を馬嵬か厚や花の風
 虎の尾の花の威をかする主
 煙絶す局^{カシ}や塩のまの花見酒
 塩のまの花見や舟のいり湊
 花新お人んすくるや善賢象
 息を風三度替るな女けんとう

七一

入逢のかね算甲や春の暮

三十日に

落汐に唱門やつれて暮の春

暮春

心あ^るりや日足も遠きよ謝の海

永日

山吹や蛙か^いも井午の二字
歎冬と^はは口^まく蛙哉

歎冬

藤歎冬つ、見の酒や三瓶子

見と、けん双立のほて^て遠極

第^一花

蹄はつはな子持しらすうかへさ哉

海老根

私に腰のへて花の急かぬ哉

藤

糸様又ある物かそり^り春

夫そのれ^の春や見ぬ日も鼻の先

風の午や共に^てな^る丸

鍋のつるも^も這まつけれよ春の暮

あんなさくら

()

四平花

四平花に生たる花の四平哉

卯花

卯花もうつ木や春の花まろり

白壁も共に卯花月夜哉

橘

橘やうるゐかふりし玉の草

たち花の陰や仙術碁の座敷

花袖

蛾はなくなるとは数えよ花袖哉

(11)

藤枝 夏部

更衣

今日きてや酒もほすて更衣かへ

杜若

すはや池の面はゆけなす白吉花

白と花水のあやかし詠鳥の見え

牡丹

牡丹ひとつなめや百のさくら花

芍薬

芍薬や猫と牡丹と忘る種

10
20
新編 甲州府志

薬玉の玉緒のはす五日哉

薬玉

竹子も神のこゝろや楊のちり

竹子

白波に白山の客や舟まつり

日吉客人権現を

祭

山彦や流ほとつきす三拍子

似我は蜂に本尊に成や子規

武蔵野や旅の道つれ郭公

酒よりも花袖こほり、白の哉

郭公

時鳥そたつ山窓や人いま瓦

山後山又物のちりや郭公

声の花や京へ山土産グット子規

声の花や桜と接穂郭公

よき夢も覚めて嬉し時鳥

車も走ひまて淀岡むほとつきす

日照にもよどむな淀の時鳥

頭痛気も嬉しや雨に子規

九

問

五月雨

五月雨は新端の萩やせうか^か民

武蔵野は五月雨をうぬ足場哉

正に長き夜か五月雨は昼もなし

五月雨は奠荷も飽了便宜哉

桂田

さ乙女や先水か、見けは乙田

里は櫻田やさ乙女の声の花

雲見草雨の瑞相や田極時

新茶

年経たる宇治の茶師と一壺の語

遠方の里を

壺渡す遠方人や宇治の古茶

あまた、ひかたふくや高麗の夜茶碗

梅

花は白く、実や梅の色なを

杏子

枇杷色も風味もまけぬ杏子哉

石菖蒲

釣し、猪も鮑、蛸もや石菖蒲

百合花

いたまぬやうつ雨まぬく百合の花

栲子

栲子も夜や若も水越

床

常夜に莖フシ然シ山床一奥座敷

鴈

露をきみ花横たける眼皮哉

夏野

羨る野は一時三里と一日哉

十ウ

順礼の棒計行菱野夜の

ことお牛一黒犬とたふる夜野哉

螢

かりのふと螢や夜の水の精

河は螢たすむ我や橋柱

涼風と螢や嶋の舟便宜

窓にきて字さしに増す螢哉

眠らせぬ貧学娘蚊と螢

蚊

新の子立蚊は短柱の

夕立や喉かほかぬに茶屋の庭

白雨

我は越る小蝇や是れ科

十一

蝇

さなき瓦に釣の糸筋や筋

鯉釣

青き子鮎よりしこき鶉の目哉

鮎

○ 飯に葉をよほふや葉の一夜霜

まじ拍やむ一宇沼丸の鮎の銘

鮎

真砂地に連理の枝やほし小鮎

干鯉

各の戸も明てこそきけせ見くろ

○ 日盛や似も色つくせみの声

蝉

里 黒の藪蚊忘るゝ小田の水鶏哉

水鶏

飛はせてとまらば蚊屋の垣のそき

賑しや飛蚊も母屋の柱陰

十一

達

白雨や連者くらふる雲の足

雲岑

富士山や飛ていつこも雲の岑

祇園會

何く在り琴破山をしりれけり

凌霄

○のうせんも日盛涼一松の陰

海松

見の房の末廣は岩をかほり哉

不肖の玉を

10 20 新宿甲州屋特製

玉かつく御意も骨切一深海松和布

瓜

大宮と南かいらや東寺瓜

瓜の目^き兼河中に云あつてもあり

雨あうて水色ますや多野の瓜

瓜見ての後の心は清水哉

土用として照日は涼まくは瓜

瓜さぬ鳥いなや丸鳥小娘瓜

香物を

浅瓜を浅くは思はし酒の糟

上

抱籠は千尋有陰なもたし

抱籠

十三才

暑き日に之を忘る、唐百哉

字書や之もまふうる士の雪

哥かきつそれも女手折扇

扇

木き露は櫂の栗か醬油桶

醬油作

氷か水より空しところこん

凝海 甚深

蓮

蓮やりんご清うと尽す錫の鈴

花よりも夢みに相恋や蓮の露

近江八景と

さ、浪や八景の餘慶志那の蓮

十三才

狸王と云も蓮花の君子哉

四時も四色の蓮の光かな

夕顔

夕白の笑には誰も独ごち

はにかやまやちさこが本のな茶碗

10 20 新宿 甲州屋特製

たきゆは汗水もりてなも

竹草

涼風の年さほりもよしんか
湯ほあみつひばらきおちり

土用平

土用平星と昼見ん茶の小袖

土用平のきぬの蒸や天津風

帷子

蓬萊の崎布や汗の隠蓑

身を冷す岩城ちい見や生糸

10 20 新宿甲州屋特製

納涼

風たきの汗も走子や帆の舟

暑き日に暑き娘も手いひん

夜の日やさかやきそれは秋の空

出茶屋涼も板敷もさす日から

涼風の心を見せん

道善

涼風やもれぬ折笠のあみ

遠江中泉八景引佐夜雨

雨涼一夜こそまされ小居眠

藤枝 秋部

初秋

すはや秋 清水か 平を去 嫌

○ 古魚の 切目の 塩や 秋の 風

一 葉ふ

一 葉ふを てもす や 紫舟 中 詠の 川

○ 戸もは 瓦り 風に 一 葉ふの 桐は 瓦り

初嵐

百日 紅見 てるを かくや 初嵐

秋 扇

秋かとも 酒のかん せん 泉 殿

市 後

河童も あらふ 心や 夏 後

水の 溜や 人形まは 市 後 川

十四才

空に水に花火を池の底に哉
 踊
 九音や踊園之庭と初嵐
 山家もや都の年女も木音踊
 相撲
 氣と若女力を落すやまけ相撲
 萩
 濱藪に声やとられて松計
 芭蕉
 はせをほの雨や流るゝ桶の水

十五才

置に似たり晴の蓮五可にもち解
 七クソ
 空を去て空色よりや星の中
 二藍の色さぬ祝へ星糸
 霧
 湖の海や二三四霧の隙
 御座舟や霧屑もれ去る須广明石
 玉祭
 孝行も今も紫苑や墓糸
 花火

十四才

朝顔

朝あさ日ひや人ひとのこころろの花はなのまね

朝あさのほほや朝あさ起あのあままにに藍あゐの色いろ

朝あさ鳥とりや露つゆも日ひ影かげににかくかく水みづんんほ

仙翁花

千々ちぢぢの秋あきははととつつの穂ほや仙せん翁う花はな

女郎花

しやんとんとたたててり見みる我われぐんぐんたりたり女むすめ郎らう花はな

萩

か萩はぎは吉きちしをを音ねぶぶる萩はぎは露つゆををささす

10
20
新編 甲州屋特製

五いつつくくの萩はぎのの声こゑききけけ萩はぎのの露つゆ

糸いと萩はぎのの文ぶん波なみややくりくり言こと夜よはは寐ね言こと

廻文

名なはは萩はぎかか河か童どう女むすめ人ひと垣かきはは花はな

ひひぬぬるるををいいふふやや薄うすとと萩はぎのの露つゆ

小こ男おとこ席せきもも角かく長なが除のぞよよ萩はぎのの露つゆ

花比糸

花はなのの糸いとかか甥せうかか萩はぎききややう

紫むらさははややかりかりのの草くさののかかざざりり哉や

女薄

野も秋の玉虫色を見物哉

丁六少

草垣は穢穢虫の踏木哉

虫

ひくうや蟬のぬけ物若しよし

虫

○旅人中関吹こゆる若菘菖

須戸にて

若菘菖

小きなうすほうつきは姫の餘障哉

鬼燈

見えわたる一葉紅もはそ損み

唇紅

上庭やぬたまん庭の鶏頭花

鶏頭花

かすかやは淋しけれ共何とやう

荊薑

這葛も神糸するいかき哉

葛

見に行くと招く尾花や諸思

乱ぬはまかきやたより糸薄

松虫は揺り声マを自慢マ哉

陰に聞や小宿鳥の鈴虫うつら草

尻声と芝居破やきりくす

新の板目つりさせとやきりくす

大の麻にまけぬや小の虫の声

色鳥

瑠璃をのほおものふるや泳りる

とんぼかへりする昔いかで山かうは龍

鶺鴒も逍遙や負義の河原筋

鶺鴒

花に金衣極にとまるや今の鶺鴒

鴨

哥は不知讀ぬる鴨の百羽がき

鴨やわが秋の寐覚の心しり

鶺鴒

将に来ん跡へもうつらのほおの色

層

つうなりて海返る層や鱗形

見分やすき三越は層の類字哉

旅行の便に

と、けかゝ泪をぬるに唇の文

径吉や樂人十列唇十つう

越中へ人に

越の旅中唇も子しうす親しうす

江鯉

はう、子と地うす胸やあめ雲

麻

鳴や夏き世山にも秋のしのみ顔

孝入

猶淋し極紅雲の山へ冬入

月

二日といふ夜男われしや月始

月の系や湖水一はいにあまの家

我は入日月取つや鏡如

世居や満ても切けとも同し月

名月

月や今夜下戸も推望の外に

初唇や月も常とは河原草

涙子唇も例かけぬ月の今夜哉

水の面に照鯉も月の最中哉

十三夜

中にもは敷嶋の月や十三夜

昼はあぐい短きや月の十三夜

稲妻

稲妻やくらき道つれ里からい

秋田

飛べは田もいなこのそよと好風哉

引板唱子富山子僧都や田の四天

菓

ありのみや心みかてう生の浦

青丹梨は花と恋る、風味哉

臺に一つむも柵の蒲萄の気色哉

落種の車やとりや袖の内

山からようもほろいなん娘胡桃

江易にて

一そ村やニ子の栗平里つき

水栗や光酒と得る月の友

肥後より上高に

肥後密柑又よき次年や播栗

駿府にて

錢別にすか密柑や幣一袋

袖味増もや孝の紅蕙見下こかれ

南天実

栞もときをいれしとくや南天の実

梅嫌

立花存所にて

えやは伊吹さし山の菊と梅もとき

葺

昔たれ松葺種葺袖の白云

白鼻をふんで同一岩葺や狩衣

紅蕙の秋をか思ふとなめすいさく

菊

今日あすや九分十分八毫のきく

葺ある所にて

九日も葺の星目や星見草

菊もあに菊なきと云ふべき

菊いかに葺には奈良の雨一時

古今集に菊の葺始て

多といへるもきく

菊の葺の父母のやうに古今集

時雨のあまた踏も見す青葉哉
 紅葉
 贈のみか我も落知はし紅葉
 はし紅葉薄約束やたり白
 楓銀杏是や誹金錦秋の山
 楓
 似た色の木と虫手の仇のほし
 袖壁や苔たも客にもりて
 楓
 かゝる道や今も修行者山の苔
 似た色の木と虫手の仇のほし
 似た色の木と虫手の仇のほし
 似た色の木と虫手の仇のほし

見せばや百袖ゆれ流るの菊の島
 仙人や百菊見せたら京と家
 昼まぬも子世やあやかる葉の酒
 古事をも思ひて
 七百葉不足や子世の葉の水
 谷隠隠居せよとや葉の水
 苔
 駿河の人に去る侍
 苔の葉の小文もきくれ十圍子
 宇津の山にて

是も又稻荷紙やうすも見ち

黄紅葉や見る目のやにのふくさ物

濃紅葉存ける物といはたぶき

江筋へまかりて

京上いはは錦かり着や彦根山

四条河原辺之舎

东山は舞臺に恥ぬ錦哉

秋雨や紅葉の病のかぞいろは

龍田河水色ぬすむ紅葉哉

酒代もらひよしや紅葉の龍田山

10 20 新編甲州道中

もつたいを筑波根貴し逢紅葉

癒癒の山姥あけらもみち哉

阿波衆無行

紅葉共見ん里の海士天が紅粉

秋山は赤土見も紅葉哉

袴衣

旅て聞や夜の書がつちの音

秋時雨

風鈴碁忘る、楼の時雨哉

雑秋

とちぶきや見ささ(守さ)初時雨
 霜
 欄干はまかきや梅の霜の花
 たくま共思はて霜や柱かた
 江州多霧山
 犬上やかな床の山霜の匂
 残菊高
 音曲も奥や残水も菊の葉
 空菊

ニエヲ

八幡中房所からかも月の秋
 秋風も緑青ふくや岩根朽
 藤枝冬部
 神送
 今日やさそ道つれ多き神送
 冬枯
 莫の木や水も冬枯の天井川
 時雨

ニエヲ

()

菊の後花四にあり水仙花
 枇杷花
 花に花のいや嘆すや枇杷の霜
 山茶花
 山茶花をたそしと思は茶の湯哉
 冬茶湯
 にえ音は初時雨かの見られ釜
 まはり炭只山からのくしみ哉
 立炭やわれとし茶に湯茶の湯
 火燧

三十一

(36)

寧菊は春うてふ
 帰一花
 立別いなはいふれよか帰一花
 小春にも見たりは厚や帰一花
 塩かまの極と見て
 塩かまのうう淋きや帰一花
 水仙花
 花の透るかそへや水仙花
 住吉や浦の管屋も水仙花
 追善

10 20 新編甲州屋特製

鉦 扣
 あらはた、かね行を鉦扣
 神 樂
 酌三寸や一女三献 大神系
 髪 置
 初もとや心霜も頼もし雪の綿
 緑子や松の髪置 雪のわた
 惠美酒講
 例の鯛も事新うや戎講
 蟬

冬は井の水の心もこたつ哉
 帶 燒
 ほたの火にます影はなし冬山家
 頭 巾
 山更に迷なもつ 頭巾哉
 綿
 吳服許の毎行
 冬よき徳さへ厚し衣と綿
 紙 子
 紙子 孫子 老ての連理比翼哉
 三才

浪こすや鳥はえこさぬ鳥羽のたて

鳥羽楯

霜月や沖の鯨も鐘の声

昨日初鯨

昨日初鯨

ふくと料れこと浦よりも境衆

境にまかりて

ニエフ

皮は冬袴や秋の色ふくと汁

鯨

袴やきの鯨は市前のをき火哉

西宮市前沖を

杖灸鯛

釣鱈の朽に成物や雪の花

鱈

寄り氷臭もつらゝのおれか綱代守

田上の川すそ分や宇治の鯉

氷臭

ふつけや臭木にくたゝ泉川

柴漬

虹に胡椒ふりやから物縁の物

京下見ぬを都鳥とやうその川
 都鳥も莫取はやかめ尻
 行鴨
 月に近き阿波門や遠く子る鴨
 死鳥
 池に経死鳥や梢を下敷敷
 鴨
 打石も水くゝる池の小鴨哉
 鴨の盛冬こそ池の水か見とり
 夜聲する鴨や氷の閑の鳥

鯽
 比海のかざりや藻より丹後鯽
 蓑和田鯉
 見のわかや江戸を滝とてのほり鯉
 追鳥
 さこそいへまら追やうす雉の鳥
 冬唇
 唇ほ草の穂綿をまらう被哉
 都鳥
 角田川にて

冬さきと見 それや雨の糸様
 雪
 十月下旬に
 月朧の時雨ほち―初太雪
 五茶わたり六か―げなし六の花
 すべり共さそふ枝あうは雪見哉
 三十一
 冬さき夜の苦や糸に減けさの雪
 窓の雪智恵ふい枝にちえの神
 冬も春の曙や雪の朝日和
 冬さき風むすか―嬉―冬さきの雪

并ぶ座も車一の鴨酒芽めたり
 葉喰
 吸口の袖を耳草や葉くひ
 電
 すはや電亭の時雨は先の月
 橘の葉もあうふの玉やこけらふき
 峠にとまり侍て
 玉電明てこそみぬ箱根糸
 うつろ付左見ものや小葉玉あうふ
 電
 三十四

北風は雪綿わたになるかゝこ哉
黒石くろいしにふくとまたらや磯いその雪
雪分ゆきぶんて行ける人を

鶴つるはぎや大鳥おほとりあやみに雪の中

月雪つきゆきの富士ふじのみ京きやうの不足ふそくかな

うしろをやいだりれて見みふしの雪

あるひは富士ふじ直下ちかと太雪おほゆきや海の底

富士ふじの雪ゆきを申まをさは余計あまや卯木垣うづきかき

移徒うつりたに

家も家いへ庭木にわぎ折やぶる雪ゆきの松まつ

三十五

10 20 新編 甲州道中

余あまの庭木にわぎ其名な忘わすれにけり雪ゆきの松まつ

神前かみまへ法系ほふけい

雪花ゆきかの都みやこ草くさ見みる北きた路ぢ哉や

しながおや突つより松まつの雪ゆき

柴しばや雪ゆきの花はなの枝えだ舟ふね勢いきほ多おほの川がは

吹風ふきかぜは雪折ゆきやぶ竹たけのふ力ちから 哉や

道明だうめい寺てらにて

竹たけあまた雪折ゆきやぶの声こゑや笈うし柏子かしら

霜雪しもゆきやあられはあか小こ築原つきはら

氷

京にはほくや年紅の莖と煤
 祝へとて年もせめつれば焼うかな
 かくめんと誰かの若か節季そろ
 節季修

冬こもる猫もや梅の花心
 蒼玉梅や春は白粉冬は紅粉

紅梅や白梅となす麴室

好文本さきたつて冬に申候
 麒麟なり花のりんなり冬の梅

早梅
 空をさつかは、後や霜に鐘

空聲
 小書院も廣目に成や冬庭敷

極寒
 かけすます岩橋やよるのあつ氷

諏訪の神や夜昼氷の橋造

三河もや池の凍の遠江
 箱櫃に惣子を水の氷哉

水口に我侘のはせぬ氷哉

白木

すいはきの仕まりや泥の中の蓮

餅花

ひらけぬ中白木か花をもちぬ花

餅花や子共をすかす焼極

歳暮

はやし物して行年や夜の豆

行年のことどりのかな今日の暮

四季四百八十句

二七八

10
20
新宿 甲州産特製

寛文十三癸丑年

元旦

帷舟

酒瓶も蓬菜にあか年漸哉

重昌

玉にたれんといはか正月

宗隆

筆をば手に取からに蛭見えて

同

しつは娘一試る筆の兄牙

維舟

包也 餘慶や稀の年の豆

七十に

同

延寶貳甲寅年

元日

維舟

賑や弥生をもとく年の花

元好

海老こきませてかざる松也

宗隆

今は春へと梅こそへ哥

重昌

舞袖は二月の雪をめぐらして

同

同

世になるやふる笛にほり鼓

宗隆

かされる陰の松の見とり子

維舟

嶋臺の花に 饅頭つ見ませて

歳暮

年々しほも延るや宝けさの春

宗隆

何かはしかん鏡のもちぬ

維舟

朧夜の月見に樽をいたかして

同

元好

蓬萊や客と我等か中の嶋

三十八

日も承き産着に厨火中やそへぬえ

同

三十九

立春一日たりければ

宗隆

来る春や去年にさばらそ志をいぬ

維舟

蓬萊はしかの葉山しけ山

章昌

泉水と霞溶れる橋かけ

同

藤枝集 追加

春

雅舟

風景をつなきとむるや糸柳

本屋奥行

空に唇の文字地りはめよ薄霞

し賀の都海は荒ぬや網の鮒

字沼

花を右酒を左や中一扇とり

京の意デシキ一ならはぬ亭やよしの花

風の斜シに落しシ何たり花の漉

10
20
新編甲州産特製

都なれや左近の櫓市前能

亀山の仙洞にて

茶酒いさや山汐の菊さくら

夜櫓の花の枕や我と蝶

夏

絶て心のとけからぬそさらは余花

耳アミの阿難アナン聞事アミ忘し子規

又上も夏や曲コク氷沙糖水

秋

朝霧よかくすも致景漢海嶋

○ 跡に娘（虫待宵の）小行燈

尾花を合奏うつうの長ましく

月も塩も十分満里五子舟

金菊に逢者も露貝の山汐哉

冬

時雨や許またうのおのこ雲

廿四孝をれはあり共 綿子哉

月雪や十方世界目の佛

外宮にをりて 誂語の連歌

十万回おほん神に奉納の

三九う

10 20 新宿甲州屋特製

預主松尾ニ休許望

連哥師や花にさそへは

四句めふり

こゝろ内にうこけは外や

伊勢様

毎日夕會のよし聞えければ

夕さりはそこに暮らせけり

夜座敷

面白や神の御聲と

杖の声

霜 往 む へ け っ ち ら ぬ や

神 慮

よ し と い ふ 句 は

飛 と っ た に

ほ に は 津 の

芦 の 枯 葉 中 に

風 吹 たり な 子

延 寶 貳 甲 寅 年

五 月 廿 八 日

染 老 筆 尺

松 江 維 舟

10
20
新 宿 甲 州 屋 特 製

昭和十三年五月十六日 校合了
原本 松本氏蔵 コリ写
後定規

